

樹木と絵画の交差点

第7回 ～歌川広重とマツ～

「東海道五十三次 日本橋 朝之景」(下図)は歌川広重(1797-1858)の代表作です。明け方の日本橋、通りは魚河岸の仕入れを運ぶ人々で賑わい、橋には江戸を出発する参勤交代の大名行列が渡ってきたところです。活気あふれる早



朝の江戸の町を通して東海道への旅の出発を鮮やかに描いたこの作品は、教科書や切手デザインで恐らく誰もが一度は目にしたことがあるでしょう。

広重は江戸時代後期、武家に生まれ、常火消同心(江戸城の警備や市中の消防を担う役目)の家督を継ぎながら浮世絵を学びました。発表した「東海道五十三次」シリーズのあふれる旅情は当時の人々の心をとらえて大成功を収めました。のちに広重版画はフランス印象派の画家たちにも支持され、特に藍色を巧みに使った空と水の美しさは「ヒロシゲ・ブルー」と呼び称えられています。

歌川広重(1797-1858)「東海道五十三次(保永堂版) 日本橋 朝之景」(部分)

(1833-1834年) 国立国会図書館デジタルコレクション

「東路に筆を残して旅の空 西の御国の名どころを見舞(みむ)」は広重の辞世の句とされています。広重は大いに旅をし、絵を描きました。その自由闊達な視点は、日本のみならず世界中の人々を魅了しています。

江戸の名所マツ巡り

広重の活躍した江戸末期は伊勢参りなどの旅行ブームが起こり、庶民の間には旅への憧れが芽生え始めました。人々は物見遊山の道中のマツ並木や絶景を楽しみ、「東海道五十三次」や「名所江戸百景」などの名所絵はガイドブックの役割を果たしたともいわれます。広重の作品はそんな当時の人々の心情にマッチしました。

情緒ある江戸の日常風景にはマツが良く似合います。広重はマツがある風景とそこに暮らす江戸の人々を生き活きと描き、その風景は今もなお私たちの郷愁をそそります。それでは広重のマツを手掛かりに江戸の名所を巡ってみましょう。



名所江戸百景 上野山内月のまつ

(1856-1858年) 国立国会図書館デジタルコレクション

画面いっぱいびつに枝が伸びた奇木(左図)。これは、台東区上野の不忍池畔にある清水観音堂の「月の松」です(右図)。

マツの枝がぐるりと円を描き、まるで月の形をしていることからこの名が付けられました。絵を見る人の視点は、画面左の幹から円を描いた枝の中央に導かれて、川向うの町の遠景をのぞき込むようなかたちになります。観るものをあっと驚かせる、広重ならではの斬新な構図です。

※不忍池畔の清水観音堂の「月の松」は、平成24年に復元されました
<http://www.taito-culture.jp/topics/tsukinomatsu/index.html>



名所江戸百景 上野清水堂 不忍ノ池 (1856-1858年)



新撰江戸名所 隅田川堤白雨之図 (1840年)
国立国会図書館デジタルコレクション

急に雨が降ってきました。風も吹きはじめたようで着物の裾がめくれています。急な天気の変り目に焦って、道行く人々は大慌てです。広重は鋭い観察眼で、走る人々の勢いや雨粒の落ちる様子をすくい取って何気ない日常の一コマを鮮やかに切り取ります。

描かれている場所（隅田堤）は隅田川東岸、墨田区向島のあたりです。隅田堤はサクラ、モモ、ヤナギが植えられ、江戸の花の名所でした。隅田川の対岸、左方の高台には待乳山^{まつちやましようでん}聖天が見えます。待乳山聖天は隅田川を望む眺望の名所として知られていました。近年もパワースポットとして人気があり、健康や良縁成就などのご利益を求める人々で賑わっています。



東都名所 増上寺 (1841年)
国立国会図書館デジタルコレクション

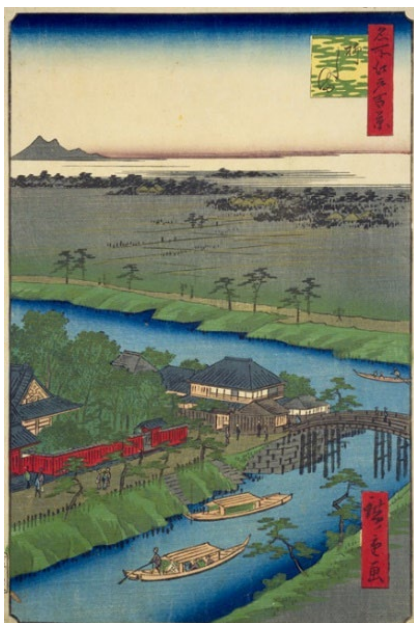
徳川家の菩提寺である増上寺には多くの人々が参詣に訪れました。広重の絵にあるように、港区増上寺山門前には松原があり、お参りがてらのちょっとした観光名所でした。よほど人気があったと見えて、広重はこの他にも



増上寺山門前の様子
(東京都港区)

増上寺を多く描いています。増上寺を中心とした一帯は明治6年、日本で最初の公園として指定されました。上写真は現在の増上寺山門前の写真です。山門は当時のまま保存されていますが、山門前の松原は焼失して、クスノキが植えられています。

※港区役所前付近に松原が一部復元されています



名所江戸百景 柳しま (1856-1858年)
国立国会図書館デジタルコレクション

墨田区の柳島妙見の妙見堂には、北極星を神化した妙見大菩薩が祀られ、葛飾北斎をはじめ江戸庶民の熱狂的な信仰を集めました。妙見堂そばのマツの巨木「影向松」^{ようごうまつ}には妙見菩薩が降臨したと考えられました。絵の左部分に妙見堂が描かれています。絵の中では「影向松」は妙見堂のさらに左奥の方向に位置しています。残念ながら今は「影向松」はもうありません。

橋のたもとの建物は当時の人気の高級料亭「橋本」です。手前の横十間川には船も描かれ、参詣とグルメを楽しむ人々の賑わいを想像することができます。

遠方には筑波山を望み、都会から少し離れた郊外の観光地といった風情です。

影向のマツについて

かつて、巨樹・古木には精霊や神様が宿ると考えられ、人々によって手厚く祀られました。ご神木になる木の種類はスギやケヤキやヒノキなどいろいろありますが、中でもマツは常に瑞々しい緑の葉をつけ、不老長寿を意味することなどから、広く庶民の信仰の対象になりました。「影向（ようごう）」とは“神仏が仮の姿をとって一時的に姿を現わすこと”を意味します。日本各地には「影向のマツ」と名付けられたマツがいくつか存在します。

現在、江戸川区善養寺には樹齢 600 年の巨樹「影向のマツ」があります。（2011 年国指定天然記念物）枝張りは東西約 31m、南北約 28m、繁茂面積は日本最大のマツといわれています。しかし 1970 年代の中頃、香川県志度町にある巨樹「岡野マツ」のほうが大きいのでは、との論争が起こり、マツの大きさ日本一を争う「日本名松対決」としてその勝負の行方が注目されました。最終的に大相撲の立行司・木村庄之助が仲裁に入り「東西の横綱マツ」として引き分け、騒動は幕引きとなりました。その後「岡野マツ」のほうは 1993 年に枯死してしまいましたが、善養寺の「影向のマツ」は今でも元気に生育しています。「善養寺影向マツ保存委員会」の管理のもと、何本もの支柱を設置して樹体の安定を図り、樹木の周囲に遊歩道をめぐらせて根元土壌を保全するなど、樹勢回復事業が行われています。



善養寺 影向のマツ
撮影場所：善養寺（東京都江戸川区）

《参考文献》

「芸術新潮 特集 広重で残った日本の風景」新潮社 1993 年 3 月号
深光富士男「世界にほこる日本の伝統文化 はじめての浮世絵 2」河出書房新社 2017 年 1 月

《参考 URL》

「台東区文化ガイドブック・文化探訪」（2022-7-16 現在、ホームページは削除）
<http://www.taito-culture.jp/topics/tsukinomatsu/index.html>

《参考 URL・画像提供》

「錦絵で楽しむ江戸の名所」国立国会図書館ホームページ（参照 2022-7-16）
<http://www.ndl.go.jp/landmarks/artists/utagawa-hiroshige-1/>